

お前たちはいったい何者だ

2009年11月10日(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

使徒の働き 19章1節から20節

アポロがコリントにいた間に、パウロは奥地を通してエペソに来た。そして幾人かの弟子に出会って、「信じたとき、聖霊を受けましたか。」と尋ねると、彼らは、「いいえ、聖霊の与えられることは、聞きもしませんでした。」と答えた。「では、どんなバプテスマを受けたのですか。」と言うと、「ヨハネのバプテスマです。」と答えた。そこで、パウロは、「ヨハネは、自分のあとに来られるイエスを信じるように人々に告げて、悔い改めのバプテスマを授けたのです。」と言った。これを聞いたその人々は、主イエスの御名によってバプテスマを受けた。パウロが彼らの上に手を置いたとき、聖霊が彼らに臨まれ、彼らは異言を語ったり、預言をしたりした。その人々は、みなで十二人ほどであった。それから、パウロは会堂にはいって、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、彼らを説得しようと努めた。しかし、ある者たちが心をかたくなにして聞き入れず、会衆の前で、この道をののしったので、パウロは彼らから身を引き、弟子たちをも退かせて、毎日ツラノの講堂で論じた。これが二年の間続いたので、アジアに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のことばを聞いた。神はパウロの手によって驚くべき奇蹟を行なわれた。パウロの身に着けている手ぬぐいや前掛けをはずして病人に当てると、その病気は去り、悪霊は出て行った。ところが、諸国を巡回しているユダヤ人の魔よけ祈祷師の中のある者たちも、ためしに、悪霊につかれている者に向かって主イエスの御名をとらえ、「パウロの宣べ伝えているイエスによって、おまえたちに命じる。」と言ってみた。そういうことをしたのは、ユダヤの祭司長スケワという人の七人の息子たちであった。すると悪霊が答えて、「自分はイエスを知っているし、パウロもよく知っている。けれどおまえたちは何者だ。」と言った。そして悪霊につかれている人は、彼らに飛びかかり、ふたりの者を押えつけて、みなを打ち負かしたので、彼らは裸にされ、傷を負ってその家を逃げ出した。このことがエペソに住むユダヤ人とギリシヤ人の全部に知れ渡ったので、みな恐れを感じて、主イエスの御名をあがめるようになった。そして、信仰にはいった人たちの中から多くの者がやって来て、自分たちのしていることをさらけ出して告白した。また魔術を行っていた多くの者が、その書物をかかえて来て、みなの前で焼き捨てた。その値段を合計してみると、銀貨五万枚になった。こうして、主のことばは驚くほど広まり、ますます力強くなって行った。

ペテロへの手紙・第一 5章8節

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。

エペソ人への手紙 6章10節から20節

終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるよう私のためにも祈ってください。私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。

コリント人への手紙・第二 10章3節から6節

私たちは肉にあって歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、また、あなたがたの従順が完全になるとき、あらゆる不従順を罰する用意ができています。

コリント人への手紙・第二 2章11節

これは、私たちがサタンに欺かれたいからです。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。

今、司会の兄弟に読んでいただいた箇所、19章15節『自分はイエスを知っているし、パウロもよく知っている。けれど、おまえたちはいったい何者だ。』は、みなさんびっくりしたかもしれません。しかし非常に大切な箇所です。信仰生活は遊びではなく、闘いその

ものです。集会の始まる前に「今日の題名は？」と、きかれたのです。ちょっと考えたのです。これがいいのではないのでしょうか。『おまえたちはいったい何者だ』

パウロは第三次伝道旅行でエペソにやって来ました。パウロがエペソに来て、エペソの信者に発した第一の質問は、あなたがたは信仰に入ったときに聖霊を受けたのか、というものでした。これは、奇妙な問いと言わなければいけないと思います。どうしてでしょうか。エペソ書 1 章 13 節を見ると、次のように書かれています。

エペソ人への手紙 1 章 13 節

またあなたがたも、キリストにあって、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。

とあります。

この箇所によると、すべての信者は聖霊を宿していることになります。けれど、19 章 2 節で、パウロに会った「いわゆる信者」は、それまでいまだかつて「聖霊」について聞いたことがなかったのです。この「いわゆる信者」は、バプテスマのヨハネによって洗礼を受けたのです。でもそれだけでした。ヨハネは荒野ではちみつをなめ、いなごを食べ、毛ごろもをまとい、神の国を証しました。ヨハネは『時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。』と叫んだのです。このヨハネのことばには二つの面があります。即ち、一つの面は、「悔い改めよ」という面です。もう一つの面は、「福音を信ぜよ」ということばで表わされています。エペソにいる人々は、罪を認め、悔い改めたのです。しかし、私たちはいったい罪を認め、悔い改めただけで、その罪を清める力をもっているのでしょうか。そうではなく、罪を認め悔い改めることは第一歩に過ぎません。

これに対してパウロは、エペソ人に対してほかの面を語りました。即ちイエス様はもう既にすべてをなし終えられたこと、イエス様は私たちの代わりに呪いとなられたこと、したがってイエス様はあらゆる罪から私たちを清めることができるお方であることを、パウロはエペソにいる人々に宣べ伝えたのです。私たちにとって、ただ罪を認め、それを告白するだけでなく、イエス様を仰ぎみつめ、もう既に成し遂げられた全き救いを感謝し、私たちをすべての罪から清めることのできる尊い血潮のために感謝することが、如何に必要なことでしょうか。エペソに住む「いわゆる信者」は、この積極的な働きかけを目にしたとき聖霊を受けることができたのです。多くの信者は新しく生まれ変わったときに聖霊を上からいただいているのに、この「聖霊の力」を体験していないことは残念なことです。イエス様の油注ぎのうちに身を投じなければ、力を体験することはできません。

イエス様の油注ぎとは、「聖霊の満たし」を意味します。イエス様が私たちの生涯の完全な支配者となられるとき、私たちはその満たしを自分のものとすることができるのです。

イエス様は、私たちの生活における限りない支配者となっておられるのでしょうか。

もし、イエス様が私たちの支配者となっておられなければ、私たちは霊的に働くことができません。なぜ、こんにちの信者は霊的に燃えている人が少ないのでしょうか。悪魔が次から次へ、あの人、この人に挑戦をしかけ、勝利を得ているからです。私たちの働きはどのレベルにあるのでしょうか。

私たちにはいろいろな力がありますが、四つに分けることができます。

- ・第一番目は、肉体的な力と強さでしょう。多くの人はこの種類の力を重要視し、これに憧れています。多くの人々はレスリングや、相撲、またボディビルに熱中しています。そんなに悪くないけれど、それで充分ではありません。
- ・第二番目の力は、知力です。頭の賢さです。東京大学を卒業した人は偉いと多くの人と考えています。司会の兄弟は東京大学に入っただけでなく、教授だったのです。だから偉いではありません。結局、彼も壁にぶつかってどうしようもないと分かったので、イエス様に頼るようになりました。理性では本物をつかめません。
- ・第三番目は、道徳的な力です。こんにち道徳的に高いレベルに生きている人は何と数少ないことでしょう。いたるところに教典があり、欺瞞(ぎまん)があり、おのれの名誉、おのれの名を主張するものがあります。他人である隣人の幸いを願う者はこんにちどこにいますのでしょうか。
- ・第四番目の力は、霊の力です。いまだイエス様を信じていない人々は、聖霊をもちろん全く知りません。この聖霊を宿している者だけが主の力を用いることができます。この力の前に、悪霊でさえ震えおののき、退散せざるを得ません。

私たちの働き、私たちのなすことは、どの範囲にあり、私たちはその働きを今述べた四つの力からのうちのどれを基盤としているのでしょうか。私たちはしばしば知力をもって主に仕え、知力をもってほかの人の益を図ります。さもなくば、道徳的な力をもってこれをします。

先に読んでいただきましたエペソ書 6 章 1 2 節です。

エペソ人への手紙 6 章 1 2 節

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

私たちの戦いは血肉に対する戦いではなく、天上にいる悪の霊に対する戦いであることを忘れることがしばしばあるのではないのでしょうか。そこで、私たちにとって最も大切な問いは、私たちはいったいどの力で働き、生活し、話しているかということです。もし、私たちが霊の力のうちに生活していないなら、その生活は失敗の連続となります。

パウロの働きにより、エペソに住んでいる信者たちの約十二人は、イエス様が上よりいただいた霊、またペンテコステの日に弟子たちがいただいた霊、また異邦人コルネリオが受けた霊と同じ霊を受けました。パウロの働きは、霊の力による働きでした。ですから、パウロの得た働きの結果はやはり霊的な結果となった、ということを中心に留めなければいけません。

しかし霊的な力をいただいたそのところに、必ず悪魔の集中的な攻撃がなされるということはしばしば経験するところです。御霊が人の上に臨むとき、それに逆らうサタンの働きもともになされることを知らなければなりません。もし、私たちが肉体的な力、知的な力、道徳的な力をもって主に仕えようと思えば、悪魔にとって私たちは敵ではありません。ですから悪魔の攻撃を受けることはないでしょう。しかし私たちがどうにかして清い御霊によって生活しようとし始めるそのとき、地獄のあらゆる憎しみが私たちの上に集中してくるのです。サタンの軍勢は、私たちが聖霊の支配下に生活することを好まず、それから何とかして引きずりおろそうと攻撃します。

エペソにおいてもそうでした。パウロによって十二人の人々が御霊に満たされたとき、悪魔の集中的な攻撃がやってきました。もちろん悪魔はいつも兄弟姉妹の上にとどまっていたのですが、十二人が聖霊を受けるまでは、悪魔にとって彼らはさほど危険な存在ではありませんでした。人の内に住みたまう内住の御霊は、悪魔の攻撃の絶好的となります。悪霊たちはパウロに従わざるを得ないことを知っていたのです。悪霊どもは、誰が霊的であり、誰が霊的でないかをよく心得ていました。多くの人々はこの悪の霊に取り憑かれています。彼らの肉体、理解力、魂は、悪魔の支配に入れられてしまっています。大部分の人は悪魔の支配のもとに屈服しています。何と多くの人々が、意識して悪魔に従おうとしていることでしょうか。

これらの人々が、私たちを通して、悪の霊から解放されることができるようでしょうか。これに対する重大な責任を私たちがもっていることを忘れてはなりません。しかし私たちが知らなければいけないことは、あらゆる悪の霊に対して戦いを挑むとき、もし私たちが霊の力をもっていなければ敗北に終わる、ということです。もし私たちが知的な力、道徳的な力をもって悪霊に攻撃を加えるなら、必ずや失敗に帰すことは火を見るより明らかです。

エペソにおけるできごとのうちに、ユダヤの祭司長スケワの子ども七人のうちの二人が悪霊に戦いを挑んだという事件があったのですが、これら二人は霊的な水準に達していなかったために、この霊に打ち勝つことができませんでした。もう一度読みましょう。

使徒の働き 19章13節から16節

ところが、諸国を巡回しているユダヤ人の魔よけ祈祷師の中のある者たちも、ために、悪霊につかれている者に向かって主イエスの御名をとらえ、「パウロの宣べ伝えているイエスによって、おまえたちに命じる。」と言ってみた。そういうことをしたの

は、ユダヤの祭司長スケワという人の七人の息子たちであった。すると悪霊が答えて、「自分はイエスを知っているし、パウロもよく知っている。けれどおまえたちは何者だ。」と言った。そして悪霊につかれている人は、彼らに飛びかかり、ふたりの者を押えつけて、みなを打ち負かしたので、彼らは裸にされ、傷を負ってその家を逃げ出した。

とあります。

スケワの子ども二人は知力で悪霊を追い出すことができると思い、「パウロの宣べ伝えているイエス様によって命じる、出て行け」と。二人は失敗しました。彼ら二人は個人的にイエス様を知っていなかったのです。ですから、悪霊は、「イエスなら自分は知っている。パウロも分かっている。だがおまえたちはいったい何者か」と。

悪霊の告白とは何だったでしょう。

*まず、「イエスなら自分は知っている」。

このことばから分かるように、悪魔と悪霊たちはイエス様のことをよく知り尽くしています。次の2、3のみことばにより、如何によくイエス様を知っているか、私たちにも理解できると思います。

マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝から一箇所ずつ読みます。

マタイの福音書 8章28節、29節

それから、向こう岸のガダラ人の地にお着きになると、悪霊につかれた人がふたり墓から出て来て、イエスに出会った。彼らはひどく狂暴で、だれもその道を通れないほどであった。すると、見よ、彼らはわめいて言った。「神の子よ。いったい私たちに何をしようというのです。まだその時ではないのに、もう私たちを苦しめに來られたのですか。」

悪魔はイエス様を「神の子」と告白しました。悪霊の告白は、「あなたは神の子です」と。

マルコの福音書 1章23節、24節

すると、すぐにまた、その会堂に汚れた霊につかれた人がいて、叫んで言った。「ナザレの人イエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちを滅ぼしに來たのでしょうか。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。」

悪霊はここで、イエス様は「神の聖者」と告白しました。

もう一箇所ルカ伝4章で「汝は神の子キリストなり」と言っています。

ルカの福音書 4章41節

また、悪霊どもも、「あなたこそ神の子です。」と大声で叫びながら、多くの人から出て行った。イエスは、悪霊どもをしかって、ものを言うのをお許しにならなかった。

彼らはイエスがキリストであることを知っていたからである。

キリストであるということは、旧約聖書で約束された「救い主」です。特別に選ばれたお方です、と。

悪霊たちは、イエス様が神の子であり、神の聖者であり、油注がれたキリストであることを知っていることが、今読んだ箇所から明らかです。イエス様がこの地上に肉体の形をとって生きておられたとき、悪霊どもは絶えずイエス様を観察し続けていました。夜昼、イエス様が御霊によって荒野に導かれ、悪魔によって試みられたとき、悪霊もともにそこにおいて、主イエスが如何なる態度をとられたかを一部始終見ていたに違いありません。

そのときイエス様が石をパンに変えられなかったこと、悪魔の前に決して膝をかがめられなかったことを見て、悪霊どもは「これはいまだかつて我々の経験しなかったことだ」と言い合ったことでしょう。

また、イエス様の変貌山で御姿を変えられたとき、そのまま罪なきお方として栄光のうちに入ることできたお方であられるにもかかわらず、自ら選んで喜びを捨て、十字架を背負われたそのことを、悪霊どもは見て知っていたに違いありません。悪霊どもは絶えずイエス様を見守り、イエス様の目的が達成されないようにと、あらゆる画策をめぐらしたことと思います。

イエス様がゲッセマネの園で苦しい祈りを捧げられたとき、無数の悪霊どもがその場を覆っていたに違いありません。聖書は主の苦しみの祈りのときを表現して、「暗黒のとき」と語っています。この世の君なる悪魔はゲッセマネの園で、イエス様に対し、最後の戦いとばかり戦いを挑みました。しかしイエス様は、自らの力では決して行動されずに、「わたしのころではなく、父よ、あなたのみこころをなしたまえ」と、祈られたのです。そのとき、悪霊どもは仕方なく退散せざるを得ませんでした。加えて悪霊どもはその後にイエス様が十字架上で叫ばれた「こと終わりぬ。すべてが終わった。万歳！完了した」というみことばを聞き、たしかにイエス様はすべてのものに勝ち賜うた勝利者であられることを悟りました。

悪霊たちはイエス様を非常によく知っていました。「イエスなら自分は知っている」と。汝イエスは、「神の子なること」、「油注がれたキリストなること」、「聖なる神の子なること」を我知る、と悪霊は叫んだのではないのでしょうか。

*二番目に、悪霊は「パウロも分かっている」と告白しました。

悪霊どもはパウロを本当によく知り尽くしていました。悪霊どもはパウロの若いときも、また成長して尊敬された聖書学者となったこともよく観察し、よく知っていました。悪霊どもは、パウロがサウロと呼ばれて悪霊どもとともに働き、主に従う者たちを迫害していた頃、そのときのサウロを確かに喜んでいただいでしょう。しかしサウロが、ダマスコにいる

イエス様のために生きたい、イエス様をお喜ばせたいと願う人々を捕らえようと思い、部下を引き連れてダマスコに向かう途上、天からイエス様の栄光の光に打たれ回心したことも、悪霊たちは知っていた筈です。その瞬間から、パウロは、「イエス様に従う奴隷」になりました。悪霊どもはパウロを知っていました。悪霊たちは、パウロの祈りの生活をいつも観察していました。パウロは自ら書いたほとんど全部の書簡の中に、「我、膝を屈して神に祈る」と書いています。

エペソ書 1章 16 節、一文章だけですが、彼の心構えを明らかにする箇所だと思います。
エペソ人への手紙 1章 16 節

あなたがたのために絶えず感謝をささげ、あなたがたのことを覚えて祈っています。

3章 14 節、15 節

こういうわけで、私はひざをかがめて、天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります。

わたしは祈る、と。

テサロニケ人への手紙・第一 1章 2 節、3 節

私たちは、いつもあなたがたすべてのために神に感謝し、祈りのときにあなたがたを覚え、絶えず、私たちの父なる神の御前に、あなたがたの信仰の働き、愛の労苦、主イエス・キリストへの望みの忍耐を思い起こしています。

絶えず、とあります。

もう一箇所

テモテへの手紙・第二 1章 3 節

私は、夜昼、祈りの中であなたのことを絶えず思い起こしては、先祖以来きよい良心をもって仕えている神に感謝しています。

夜昼、(たまにではなく)です。

パウロが筆で働くよりももっと多くの働きを膝でなしたことは、想像に堅くありません。パウロは膝で働きました。祈りによって働きました。悪霊どもはパウロが祈っている姿をいつも見ていたことでしょう。パウロが祈るとき、いつも悪霊どもはその祈りを妨げようとしたので、パウロの祈りは戦いの連続でした。パウロは、悪霊によって抑えられれば抑えられるほど、激しく祈ったことでしょう。パウロは勝利が与えられるまで祈り続けました。

悪霊どもは、「我、またパウロを知る。我々は彼の祈りを聞く。私たちはかつてこのような祈りを聞いたことがない。パウロは私たちに勝った。どうすることもできない」と叫ん

だことでしょう。パウロが毎晩一日の歩みを省みて、常に清く良心を保つべく主の御前にひざまずき祈る様も、悪霊どもは見ていたに違いありません。パウロは、主とおのれとの間に何の妨げも入らないように、と祈っていたに違いありません。パウロは悪魔が集中的な攻撃を加え、それにより盲目にし、また麻痺させ眠り込ませるといった攻撃方法をよく知っていました。悪霊どもは、このパウロにはどうしても勝つことができない。従うよりほかに仕方がない、ということを知っていました。パウロが「出て行け」と叫ぶと、悪霊どもはパウロに抵抗することが無駄であることを知り、直ちに出て行かなければならなかったことが、聖書によっても明らかです。悪霊どもは、「イエスなら自分は知っている」だけでなく、「パウロも分かっている」と言ったのです。

*しかし、三番目は問題です。「だが、おまえたちはいったい何者か」。

スケワの息子二人の場合は全く別でした。悪霊どもはスケワの子二人に、「おまえたちはいったい何者だ。小人どもよ。我、お前たちを知らず。我、いまだかつて汝らについて聞いたことなし。地獄に汝たちの話題がのぼることはない。エペソに住む二三の者たちのほか、汝らを知る者はいない。おまえたちはいったい何者だ」と、侮蔑の言葉をあびせかけています。

私たちはどうでしょうか。私たちは地獄で知られている存在でしょうか。悪霊どもは私たちを知っているのでしょうか。悪霊どもは私たちを恐れているのか、それとも、あざ笑っているのか。私たちを通して、主なる神の豊かな知恵が、天のところにある悪霊どもに対して現わされているのでしょうか。私たちによってこそ、イエス様の勝利が示され、現わされなければならないのです。

私たちには、兄弟姉妹の一致、主イエス様のからだの「霊的な交わりをはかるための戦い」と「苦しみに対する戦いの備え」ができているのでしょうか。それとも、私たちはおのれの名誉を求め、教義や偽りを持ち、妬み、或いは猜疑心を起こし、「おのれの名誉を求めて己がためにことをなしている」のでしょうか。どうでしょうか。

主の目からご覧になるなら、主のからだなる教会に属する兄弟姉妹は如何に主の御前に愛されている者であり、尊い者であるか、心のうちに深く知っているのでしょうか。私たちは、イエス様のからだなる教会の秘密も既に望み見て知っているのでしょうか。このことを他の人に聞いたり、頭の中で理解しただけでなく、上からの啓示により、心の目でもう既に見たでしょうか。

もしこの秘密を、私たちがまだ心の目で見えていないなら、私たちは悪魔にとって危険な存在ではないのです。悪魔は決して私たちを恐れません。もしこの主イエス様のからだなる教会の秘密を心の目でまだ見えていないなら、罪の中に生活している私たちの愛する姉妹のために、また自らの道を選んで歩んでいる兄弟のために、泣いてとりなすことは絶対にできないのです。

スケワの子二人は、悪霊どもを追い出そうと試み、パウロの宣べ伝えているイエス様の名を使ったのです。しかし、悪霊は二人に向かい、あなたがたが命じて我々は出て行かない。我々はお前たちを知らない。お前たちは誰か。もしパウロがやって来るなら我々も出て行く。しかしお前たちが命じたのなら出て行くものか、と言ったのです。悪霊はこう言って二人にとびかかり、二人に勝ち、これを打ち伏してしまいました。聖書は「彼は裸になり、傷を受けてその家を逃げ出でたり」と述べています。悪霊は二人の人間よりもっとも強く働きます。このためにパウロは当時のエペソにいる兄弟姉妹に書いたのです。先に読みました箇所です。

エペソ人への手紙 6章12節

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

血肉に対するものではなく、(つまり目に見える人間に対するものではなく、)です。

イエス様が変貌山から降りて来られたとき、悪霊に憑かれた子どものいる父親がイエス様のみもとに来て、「主イエス様、私の子どもは悪霊に憑かれ、だんだんやせ衰えてまいります。お弟子たちに悪霊を追い出してくださるよう頼みました。しかしできませんでした」と言ってきたことが、マルコ伝9章をみると明らかです。これに対しイエス様は、「ああ、信仰のない世の中であることだ」と言われました。イエス様は悪霊を追い出し、「このたぐいは祈りによらなければ、不可能だ」と言われたのです。悪霊は私たちが聖霊の範囲の中にいるときだけ、追い出すことができるのです。

こんにち、暗黒がこの世を覆っています。悪霊どもが、社会のうちに、家庭のうちに、職場のうちに、工場のうちに、学校のうちに、意識しながら罪の生活に堕ちて行く姉妹のうちに、またかつてはイエス様を賛美しながら、今では尊い主のみもとから離れてしまった愛する兄弟たちのうちに支配権を執っているのではないのでしょうか。多くの兄弟姉妹の間に、不従順の子らのうちのみ働く悪の霊が活躍しているのを見ることができます。

私たちはもう一度新しく自らを主におささげしようではないでしょうか。もし悪の霊が私たちの生活のうちに支配権を執り、その働きをほしいままにしているなら災いだ、と言わなければなりません。もし兄弟姉妹が悪霊に支配され、その悪霊が、「イエスなら自分は知っている。パウロも分かっている。だがお前たちはいったい何者か」と言っているとすれば、災いなことでしょう。

私たちは祈りのない哀れな存在です。私たちは祈りなく、うつろな存在であることを認めなければいけないのではないのでしょうか。

あの兄弟は祈りの人、この姉妹は祈りの人だ、と一人一人が証しされるなら本当に幸いと思います。私たちの祈りによって悪魔が縛り付けられ、その活動力を奪われ、私たちの名が地獄で知られ、恐れられ、またエペソ書3章10節『これは、今、天にある支配と権威とに対して、教会を通して、神の豊かな知恵が示されるためであって、』にあるように、主なる神の豊かな知恵がこの愚かなる私たちを通して現わされること、これが私たちの心の願いであり望みです。『自分はイエスを知っているし、パウロもよく知っている。けれどおまえたちは何者だ。』

最後に一つ、南ドイツの家の外側の壁に書かれていることばを紹介します。長いのですが、ちょっと珍しい(おそらくそのような家はない)と思います。

あなたがたは、わたしを「主」と呼んでいる。しかし、わたしに頼ろうとしない。
あなたがたは、わたしを「光」と呼んでいる。しかし、わたしを仰ぎ見ようとしなない。
あなたがたは、わたしを「道」と呼んでいる。しかし、わたしに従おうとしない。
あなたがたは、わたしを「いのち」と呼んでいる。しかし、わたしに近づこうとしない。
あなたがたは、わたしの「知恵」を認めている。しかし、聞く耳を持つとうとしない。
あなたがたは、わたしの「美しさ」を認めている。しかし、わたしを愛さない。
あなたがたは、わたしの「富」を認めている。しかし、わたしに頼もうとしない。
あなたがたは、わたしの「永遠の存在」を認めている。しかしわたしを探そうとしない。
あなたがたは、わたしの「恵み」を認めている。しかし、わたしを信頼しようとしなない。
あなたがたは、わたしの「全能」を認めている。しかしわたしを褒め称えようとしなない。
あなたがたは、わたしの「誠実さ」を認めている。しかし、わたしを畏れない。
もしわたしが、あなたがたを「呪われた永遠の火」に渡しても驚いてはいけなない。

すごい文章ではないのでしょうか。

「あなたがたは、『よろこびの集い』に参加する。『火曜日の学び』に参加する。しかし、聞く耳がないし、悔い改めようとしなない。だから、わたしは、あなたがたを祝福することができない。わたしの力を現わせなない。あなたがたを用いることができない」とイエス様が仰せられるようになれば、大変なことではないのでしょうか。

了